

Mr. Vertigo における浮き沈み

大工原 ちなみ

Paul Auster の *Mr. Vertigo* は、空を飛ぶ術を身に付けた Walter Claireborne Rawley 少年の成功物語に小説の大半が割かれてはいるものの、飛ぶことができなくなった後の転落や、その後の成功と転落の繰り返しの人生が丹念に描かれているところから、単に成功と転落というテーマのみならず、浮き沈みというその二つの要素の繰り返しにこそ力点がおかれている作品と考えられよう。例えば Auster の *Leviathan* に於いても浮き沈みのテーマが繰り返されていることから、Auster にとってこれが主要テーマの一つであることが推察できる。Dennis Barone は、*Mr. Vertigo* には、死と再生の繰り返しというテーマがあると述べているが、下降のボトムが死であり、そこから再生して上昇すると考えれば、これもまた浮き沈みの一つとして捉えることが可能であろう。

この小論では、*Mr. Vertigo* の中に見られる様々な浮遊と沈降について考察を試みたいと思う。

1. 作品の背景に見られる浮き沈み

a. 時代¹

この作品の中で描かれている時代は、主として1920年代から30年代にかけてのアメリカである。折りしも1927年に、Charles A. Lindbergh によって、単独大西洋無着陸横断という偉業がなされ、人間が空を飛べる時代に突入した。この点で華々しい人類飛翔の時代の幕開けである。

経済面で言えば、第一次世界大戦後の経済不況を引きずる形で幕開けした20年代であったが、テクノロジーの発達と消費社会の発展に助けられ好景気を迎える。だがそれも束の間、1929年10月の暗黒の木曜日に一気に転落する。このようにこの時代の経済は、下げ止まりの停滞から急激な上昇を経て、一気に転落するという激しい浮き沈みを見せている。

世の風潮としても、映画や野球、ジャズなど様々な娯楽が人々の生活に華やぎを与え、服装や行動等で自由奔放に振舞う flapper がもてはやされる一方で、禁酒法下でのマフィアの暗躍、第二次KKKの興隆等、不寛容さと社会や人間心理の下部に潜む暗い部分が目立ち、明と暗が同居する時代でもあった。

以上のように、この時代は種々の意味で激しい浮き沈みの要素で特徴づけられているといえ

よう。

b. 場所

作品の中に出てくる場所も浮遊あるいは上昇と深い繋がりを持つものが多い。

まず主人公の Walt の出身地であるセントルイスは、後で詳述するように、リンドバーグが大西洋を横断したときの飛行機の名前 "Spirit of St Louis" に使われるくらい彼の飛行と密接に結びついている。² また Walt が愛してやまないセントルイスの野球チーム、カーディナルズのニックネームは、"Redbird"と空飛ぶ鳥の名前になっている。更にこの町は、作品の中で「今世紀最悪の竜巻」に襲われる町となっている。竜巻は、地から天に向かって伸び、地上のものを空に巻き上げるという点で上昇のシンボルといえよう。

竜巻については、Walt が Yehudi に連れられて行った二つ目の Walt の居住地であるカンザスとも密接な関係がある。中西部のカンザス州は、Walt も、"the land of Oz" (11) と言っているように、『オズの魔法使い』の舞台となったくらい竜巻の多い所である。更に作品の中で Yehudi は、「山も木も、道路に瘤すらない」くらいまっ平なここでは、"there's nowhere to go up – that sky is the only friend you have." (10) と、竜巻に襲われずとも上昇し、空を友にするしかないのだと語っている。この地はまさに Walt にとって飛翔の訓練に似つかわしい場所であったのである。

更に Witherspoon 夫人が長年住み、Walt が彼女と晩年を過ごした Wichita の町も、その頃には、航空機会社がいくつもこぞって工場を建てたために、"Air Capital of the World" (269) と呼ばれていた。このことに対して Walt は、"I couldn't help thinking about myself, the original birdboy who'd once called Wichita his home." (269) と、「鳥」少年の故郷が、空の町として発展したことに奇遇を感じている。

このようにこの作品の中で重要な意味を持つ場所の多くも、飛翔や上昇、空と密接に関わっているのである。

c. 名前

主人公の Walt は、正式には、Walter Claireborne Rawley という。この名前については、Carsten Springer も *A Paul Auster Sourcebook* の中で指摘しているように、歴史上の二人の人物、つまり、北・南米大陸遠征を試みたが失敗し、ロンドン塔に幽閉された後刑死した、エリザベス女王の寵臣であった Sir Walter Raleigh と、ヴァージニアにイギリスの植民地を作ろうとした、William Claiborne という二つの名前を合成したものと考えられる。この二人がいずれもアメリカのパイオニアとして働いた人物であり、Walt が浮遊術を学んだ Cibola の町も、初期のスペインの探検家たちが、アメリカ南西部にあると信じ、莫大な財が在るとされた伝説上の都市にちなんで名前をつけたものであることから、Walt がパイオニアと密接

な関係があることがわかる。³ そして彼自身が、空のパイオニアとして自覚している場面がある。

I've always found it strange that Lindbergh's stunt coincided so exactly with my own efforts, that at the precise moment he was making his way across the ocean, I was traversing my little pond in Kansas — the two of us in the air together, each one accomplishing his feat at the same time. It was as if the sky had suddenly opened itself up to man, and we were the first pioneers, the Columbus and Magellan of human flight. I didn't know the Lone Eagle from a hole in the wall, but I felt liked to him after that, as if we shared some dark fraternal bond. It couldn't have been a coincidence that his plane was called the *Spirit of St Louis*. That was my town, too, the town of champions and twentieth-century heroes, and without even knowing it, Lindbergh had named his plane in my honor. (86-7)

ここでは、コロンブスとマゼランの名前を出しながら、アメリカのパイオニアである彼ら同様に、Walt がリンドバーグと並ぶ（あるいは彼を凌駕した）空のパイオニアであると自負している。このように彼の名前は、冒険家やヒーロー、パイオニアを示唆し、更にそれは空のパイオニアへと、浮遊という要素で結びついているのである。

更に彼のミドルネームの Claireborne という名前には、airborne という意味も含まれていると言えないだろうか。空中を飛べたという意味は無論のこと、飛べなくなった後、タンポポの綿毛のように暫く放浪の人生を送る彼の姿もまた示しているように思えてならない。

以上、時代・場所・名前という作品の背景にも浮き沈みの要素が散りばめられている点について述べてきた。次に主要登場人物たちの人生に見られる浮き沈みについて検証を試みたい。

2 人生の浮き沈み

a. Walt

物語の冒頭で、Walt は、Yehudi が飛行術を教える対象として自分を選んだ理由として、"Master Yehudi chose me because I was the smallest, the dirtiest, the most abject." (3) と、彼があらゆる点で最低の人間であったからと分析している。確かに、Walt の人生はスタートから最低で、戦争のために父を失い、その後、売春しながら彼を育てていた母も警官に撃たれて亡くなっている。母の姉のペグとスリム夫妻に引き取られるが、ろくに養ってもらえず、物乞いをしたり使い走りをする等、身寄りの全くない浮浪児と変わらない生活を送っていたことから、家庭環境という点からみても最低の状態に置かれていたといえよう。学校にも行っていないので教育もなく、文字も自分の名前に含まれているアルファベットが辛うじてわかる程

度である。家族がなく愛情を受けることがなかったため、Yehudiに引き取られた後も、AesopやネイティブアメリカンのMother Siouxの愛を当初は受け入れることができない。またYehudiとの会話からは、精一杯虚勢を張っているすれからしの子供という印象を受ける。更に彼は人種差別主義者⁴でアフリカ系の、Aesopに向かって、"I ain't shaking hands with no nigger," (13)と侮蔑的な態度をとっている。またMother SiouxやYehudiをジプシーと蔑み、Yehudiがユダヤ人とわかると、「ジプシーよりもひどいユダ公(kike)か」(21)と、WASP以外の人に対する侮蔑の念を露にする。このように彼は人を差別はしても、人を愛する力は無く、愛情を受け止めることもできない。

このような状態にあったWaltに向かってYehudiが言った"You're no better than an animal, ... a piece of human nothingness." (3)という言葉は、その時から68年経ているのにWaltの耳には今でも「彼の口から出ているかのように」明白に聞こえてくる程、真実味を帯びたものとして響く。このようにWaltは最低の人間、いや、人間とすらいえない動物同様の人間的にはゼロの状態にあったといえよう。

ゼロから始まった以上、Waltの人生は昇るしかないわけだが、単に上昇したのではなく、その後、アップダウンを果てしなく繰り返していく。Yehudiの厳しい訓練の結果、Waltは空を飛べるようになる。だが、まず最初に訪れたこの絶頂の時に、KKKに家を襲撃されて兄のようなAesopと母と慕っていたSiouxを殺害されるというどん底の悲しみを経験する。Yehudiと共にその悲しみも乗り越えて、"Walt the Wonder Boy"として売り出し、地方のステイトフェアの見世物から始まり、大都市の劇場での上演を目指して徐々に評判を上げていく。ところが、金目当ての伯父のスリム等に誘拐されて再び「地獄に突き落とされる」(163)。しかし首尾よく彼らから逃亡し、「一ヵ月後には、皆の人気者」(163)になっている。ショーの出演者の中でも今では取りを務めるようになっていたが、Yehudiは更に、サンフランシスコからニューヨークまで一流のアリーナで行うワンマンショーの旅"A triumph march across America" (183)を行おうと更に上を目指すのである。そして"New York was top banana, ground zero on the show business map" (183)と考え、ニューヨーク公演をハイライトにする予定でいた。

ところがこの上昇に再び暗雲が立ち込め始める。Waltは、ニューヨーク公演も間近に迫っていたニューヘイブンの公演で失敗し転落した夜に頭痛に襲われた(Yehudiもその呼応するかのように胃痛に襲われトイレに)のを皮切りに、浮遊するごとに頭痛を覚えるようになり、しかも次第に痛みの激しさが増し持続するようになる。ついにはフィラデルフィアの病院に担ぎ込まれ、検査攻めにあうまでひどくなる。⁵ 検査の結果は健康そのものであったが、Yehudiには原因が想像できており、これは空中浮遊者が直面することがある問題で、思春期と関係していて、たとえその原因を断つ為に去勢しても芸を続けられる可能性は50%⁶しかないという。

結局二人は浮遊芸をやめることに決め、ここで Wonder Boy としての Walt の華やかなキャリアに終止符が打たれる。

このとき Yehudi は Walt に今後の生き方を三つ提示する。彼はその中から、これまでの貯金でつましく生きる平凡な生き方でも、空中浮遊について講演して歩くという過去の栄光にすがって生きる生き方でもない、ハリウッドへ行って映画俳優として生きるという一番華やかな生き方に決める。「再び人生レースを走り始めた」(197) ののである。ところが、ハリウッドに向かう途中、砂漠の中をカリフォルニアに入ったとき、「人生最悪の日」(201) を迎えることになる。スリム伯父を含む四人の強盗に襲われ、所持金のすべてを奪われ、Yehudi は肩を撃たれて瀕死の重傷を負うが、車も奪われており、彼を病院に運ぶ手立てすらない。Yehudi は自分が胃癌のため余命が幾ばくもないことを打ち明け、Walt に銃で頭部を撃つよう嘆願するが、Walt にはできず、結局 Yehudi は、"Remember the good times Remember the things I taught you." (211) と言い残して自ら命を絶つ。今では実の父親のように思われた Yehudi の死に、Walt は自分が飛べなくなったとき以上の衝撃を受けるのである。

このように精神的にも経済的にも再びどん底に落ち込んだ Walt は、スリムを探し当て復讐することだけを考えて次の三年を過ごす。浮遊の公演をしながらサンフランシスコからニューヨークまで移動する代わりに、伯父の居場所を突き止めるために物乞いしたり、こそ泥を働きながら渡り歩き、すっかり「もともと生まれついていた乞食に逆戻り」(215) してしまう。Walt 自身が指摘しているように、この聖杯伝説にも似たスリム伯父探索の苦難に満ちた旅は、やがて伯父に毒杯を仰がせる事で終止符が打たれる。

スリム伯父に復讐するという生きる目的も失い、再びゼロの状態に戻った Walt は、スリムを雇っていたマフィアのビンゴ・ウォルシュの下で働くようになり、用心棒代の集金に始まり、ナンバーズや場外馬券担当と徐々にアンダーグラウンドの世界で伸び上がっていく。途中、Yehudi の友人であった Witherspoon 夫人に会い、テキサスでの油田の仕事を一緒にしないかと誘われるがその申し出も断っている。やがて彼は、その名も Wonder Boy という馬で一儲けをし、その金で Mr. Vertigo's という名前のナイトクラブを作る。その頃の自分を Walt は、" I was riding the express train which a one-way ticket to Fat City." (239) と述べており、いかに彼の暗黒世界での地位の上昇がすばやいものであったかわかる。

それから三年半、彼は Mr. Vertigo's のオーナーとして至福の時を過ごす。しかし "I was all the way at the top when I stumbled, and it ended in a real Humpty Dumpty for me, a spectacular swan-dive into oblivion." (241) というように、絶頂の最中にまたしてもハンプティ=ダンプティのような大転落が彼を待ち受けていた。Walt は前にも述べたようにカーディナルズのファンであったが、とりわけ名投手であった Dizzy Dean⁷ を愛していた。カーディナルズ時代輝かしい実績を作り多くの人に愛されていた彼であったが、下り坂を迎え、

左足の親指の骨折を境にほぼ選手生命を断たれシカゴカブスへトレードに出されていた。その彼が、Mr. Vertigo's に姿を現したのである。Walt の思いは「普通なら絶頂期であるはずの27, 8歳で、世界のトップピッチャーが既に過去の人になっている」(247) ことに向けられる。その後も、Dizzy は、散々の成績しか残せず、ついにはマイナーリーグ落ちまで囁かれるが、一向に引退しようとしなない。

Walt 自身も自己分析しているように、二人が同じセントルイスの出身であるだけでなく、Wonder Boy としての過去の自分と野球選手としての彼の華やかな過去を重ね合わせ、また Dizzy と Vertigo が共に眩暈を意味するという一致もあって、彼が自分の"alter ego" (250) に思われてきていた。ついに、"His triumphs were my triumphs, and when bad luck finally caught up with him and his career fell apart, his disgrace was my disgrace." (252-3) と考えるに至った Walt は汚辱に終止符を打つため、彼を自殺に追い込むことが自分の使命であると考えられるようになる。そこには、"I would destroy Dizzy Dean, and in so doing I would finally destroy myself." (253) というように自己破滅的要素も絡んでいた。当然のことながら Dizzy は自殺を強制されることを拒み、Walt は殺人未遂容疑で警察に捕まり、Mr. Vertigo's を失う。

しかし、"Losing Mr Vertigo's was hard on me, but not half as hard as giving up the act had been, not a tenth as hard as losing the master. I was nobody special now. Just my old ordinary self again" (259) とあるように、Walt はこの転落を泰然と受け入れ、再び振り出しのゼロの自分に戻るのである。彼は、判事の裁量で刑務所に収容される代わりに軍隊へ入る。この間の4年についてはほとんど記述はなくただ「燃え尽きて、先の事を考えたり、計画を立てることもできない」(263) 状態で帰還したとある。その後、数年東部を放浪した後、ニュージャージーのパン工場で働くことになり、モリーと結婚し23年間平凡な暮らしをする。この時期は、Walt の浮き沈みに富んだ人生の中で、ほとんど唯一浮き沈みのない稀有な時期といえよう。彼女に乳癌のために先立たれると、彼はアルコール中毒になり、再び全て（といっても今回は金銭的には失うものはほとんど無かったが）を失う。デンバーの大学に勤める妻の甥に掃除扶の仕事を手伝ってもらい、デンバーに向かう途中、郷愁の念に駆られて Wichita に立ち寄り、石油の事業で失敗したものの、ここでコインランドリーの会社を起こし成功していた Whitherspoon 夫人と再会し、それ以後11年間、彼女の会社を手伝い事業を発展させ、夫人の男友達のピリーの死後は、夫婦同然の生活を送る。この時期は派手さは無いものの静かな成功といえるだろうか。彼女がなくなると派手な葬儀をして彼女を見送っている。そしてその後、死後出版されるはずの自伝 *Mr. Vertigo* を書き終えたという記述でこの物語も終わっている。

このようにゼロからスタートした Walt の人生は、Book I で浮遊の成功と Aesop 及び

Sioux の死、そして Book II で Wonder Boy としての成功と浮遊キャリアの終結並びに Yehudi の死、Book III では、アンダーグラウンドの世界での成功と失脚、Book IV で平凡だが幸福な結婚生活と妻の死による終結、Witherspoon 夫人との夫婦同様の生活とその終結というように、上昇と下降の振幅に差はあるものの生と死のドラマに彩られた浮き沈みを繰り返しているのである。

b. その他の登場人物

この作品の中には、他にも浮き沈みに富む人生を送った人々が、多数登場する。Aesop は結核で母に死なれ、ジョージアの綿花畑を二日間這いずり回って死にかけていたところを Yehudi に拾われた孤児で障害のある赤ん坊であったが、彼の愛情と教育を受けて、奨学金付きでイェール大学に入学を認められるという絶頂期を迎えるのだが、その直後 KKK の手で虐殺されている。Mother Sioux は、Sitting Bull を祖父の弟に持つ、スー族のお姫様であり、バッファロービルの目に留まり、ワイルドウエストショーに出演することになる。このためにその直後に起こったウンデッドニーの虐殺を免れる。その後一座と世界中を華々しく巡り歩いた後、テッドというアイルランド人と結婚し幸福になるが、愛娘と夫を列車事故で失い、失意のうちにアメリカへ帰ってきて別のテッドと結婚するが、彼は飲んだくれの乱暴もので、歯が何本も折れるくらい殴られているところを Yehudi に救出され、Aesop を育てながら平穏な生活を送るが、Aesop と共に KKK に殺されて人生を閉じるという波乱万丈の生涯を送っている。

このような浮き沈みは、Witherspoon 夫人の場合にも見られる。若くして Wichita 生れのハンサムな金持ちと結婚し、シカゴで贅沢三昧な生活を送るが、夫のギャンブル癖のために破産。夫は最後の賭けで、シーボラの農場と妻を Yehudi に取られピストルで自殺する。しかし夫人は賢明にも早々に夫の放蕩に気付き、少しずつ金を株等に投資し一財産作っていた。Walt が誘拐された時には、身代金を作るために株を売り払っており、これが逆に幸いして株の大暴落を免れている。その後石油で成功し、ニューヨークの五番街に居を構えるが、テキサスでの石油採掘に失敗して、Wichita に戻るものの、コインランドリーで再び金持ちになるという具合である。彼女の場合、運命に翻弄されながら浮き沈みを繰り返すというよりもむしろ、優れた先見の明と企業心で、沈んでも自らの力で浮かび上がることができる才覚の持ち主と言うべきであろう。

実在する歴史上の人物にしてもしかり。すでに Dizzy Dean については述べたが、Walt と同名のローリー卿は、エリザベス一世の寵児にまで登りつめたものの、失脚しロンドン塔に幽閉された後、断頭台の露と消えている。またリンドバーグは平凡な家庭に育ち成績も平凡なものであったが、空への憧れの思いとセントルイスの実業家たちの資金援助のお陰で、ニューヨーク・パリ間のノンストップ飛行に成功し一躍英雄になる。しかしその後の人生は、子供を誘拐

されて殺害されるなど悲劇も襲い、反戦運動が過ぎて、ルーズベルト大統領から国家の反逆者呼ばわりされたり、生体を永遠に生かし続ける装置の開発に取り組むなど常軌を逸した面も見受けられるようになる。

どのような人間にも必ず、人生に多少の浮き沈みはみられるであろうが、以上のように Auster 作品の中では意図的にその明暗のコントラストや高低のギャップが際立つように描かれているように思える。

最後にこの作品のメインである Walt の飛翔を可能にしたものは何であったのか、分析を試みたいと思う。

3 Walt と飛翔に於ける浮き沈み

a. 浮遊の条件としての絶望

物語の最後で自らの飛翔経験を振り返りながら Walt は、Yehudi が自分に課したほとんど拷問に近い肉体的な鍛錬は必ずしも必要不可欠なものではなく、「飛ぶために本当に必要だったのは、絶望だけだったのかもしれない」(278) と語っている。かれはまた、浮くためには特別の才能など必要なく、誰もができる可能性を秘めているとも言っている。彼が語る飛翔のプロセスをみてみよう。

You must learn to stop being yourself. That's where it begins, and everything else follows from that. You must let yourself evaporate. Let your muscles go limp, breathe until you feel your soul pouring out of you, and then shut your eyes. That's how it's done. The emptiness inside your body grows lighter than the air around you. Little by little, you begin to weigh less than nothing. You shut your eyes; you spread your arms; you let yourself evaporate. And then, little by little, you lift yourself off the ground. (278)

上記の引用にもあるように、自分自身で在ることを止めると、魂が抜け出ていき体の中に空虚さが広がり、周囲の空気よりも無よりも軽くなり、霧散されて体が浮く。この飛翔のための前提・スタートとなっている自分自身であることを止めさせるために、Yehudi が Walt に対して用いたのが、絶望を通じて自己存在を放棄させるという手段であったと考えられよう。Yehudi が Walt を絶望の深みへと導くプロセスをみてみよう。

Yehudi に見出されたときの Walt は先にも述べたように、浮浪児でほとんどゼロの人間であった。それを駄目押しするかのように、Yehudi は、開口一番、「動物同様」で「人間的価値はゼロ」であり、「ゼロだから何も知らない」(3) と、Walt の人間性を否定し続け、それがふさわしいからという理由で、納屋に動物と住ませる。その頃の自分を Walt は、"I was scarcely a hair's breadth greater than nothing, a molecule or two above the vanishing

point of what constitutes a human being" (15) と表現している。このように Walt はすでに限りなく無に近い人間以下の動物のような存在であったのに、彼に飛ぶための訓練について聞かれた時、Yehudi は、「まず最初になすべきことは、精神を打ち砕くことだ」(17) と返答し、更に既にその訓練は始まっていると言っている。先にあげた、ゼロの人間であると繰り返し述べて人間的価値を否定する事から、既に精神を打ち砕く訓練は開始されていたと言えよう。次の訓練は、Yehudi の家に Walt が着き、人種的偏見から Aesop との握手を拒否した時に行われている。Yehudi は鉤型に丸めた人差し指で、軽々と Walt を宙に浮かし、それまで味わったことも無い激痛を与えて、同じ人間を差別する彼を諫め、逆らうならナメクジにしてやると脅しをかける。このように恐怖心を植え付けて、絶対服従を求めることも絶望へと至らせるプロセスの一環であったと考えられる。

その後、Walt は四度に渡って Yehudi からの逃亡を試みるが、いずれも失敗に終わる。いずれの逃亡も、突然の天候の変化に妨げられたり、論理的にも物理的にも不可能な状況で Yehudi が登場して Walt の逃亡を妨害している。最後の逃亡などは、ヒッチハイクで遠くの Wichita の町まで辿り着いたものの、突然の吹雪で方向を見失い命からがら灯りのついていた一軒家に助けを求めるとそこは Yehudi の女友達の Witherspoon の家であり、しかも彼が Walt を待ち受けていて、"However far you run, I'll always be waiting for you at the end. Master Yehudi is everywhere, Walt, and it isn't possible to escape him." (31) と駄目押しをし、Walt に自分からは絶対に逃げられないことを悟らせるのである。

Walt は、死んで地獄にいるのではないかと思われる程、激しいショックを受け、惨めさがこみ上げてきてついには気絶してしまう。そのみならず高熱を出し生死の境を彷徨うことになる。Yehudi はそれを "the Ache of Being" (32) と呼び、Walt が彼に絶対服従するしかない悟った精神的なショックから引き起こされた病であると説明する。確かにここで彼は絶望感を覚える。しかし必死になって看病したり心配してくれた Yehudi も含めた周囲の人々の愛情によって、彼の心の中にも嫌悪に代わって愛や信頼が芽生えたことも確かである。

この段階で33段階ある飛翔へのプロセスのうちの12までがクリアされたことが明かされるが、それと同時にこれからの訓練は、決してたやすいものでないことも示唆される。しかし Yehudi に対しては、「創世記でアブラハムがイサクを山に連れて行く時にイサクが感じたであろう」(138) 信頼感が確立しており、Walt は師に対する信頼と絶対的服従でそれを乗り越えようという気概に満ちている。まず Walt は、燔祭として山に連れて行かれる代わりに、地面に穴を掘らされてそこに生き埋めになる体験を強制される。その体験をすると世界はもはや二度と同じには見えない。

From then on, everything that happens to you on the surface is connected to those hours you spent underground. A little seed of craziness has been

planted in your head, and even though you've won the struggle to survive, nearly everything else has been lost. Death lives inside you, eating away at your innocence and your hope, and in the end you're left with nothing but the dirt, the solidity of the dirt, the everlasting power and triumph of the dirt. (41-2)

生き埋めとは、ゼロである地平線よりも下に沈むと言う意味で象徴的体験といえよう。この体験の結果、ホロコーストを辛くも生き延びた生存者のように、死が心の内に住み着き、希望を食い尽くされ、ただでさえほとんどゼロの状態にあったのに、生すらほとんど奪われた状態になったことがわかる。それ以後訓練は更に厳しく恐ろしいものになっていく。Walt はそれを、"sheer reptilian stubbornness"と "a brainless passivity" (42) でもって耐え抜いていくのである。「頭蓋骨も凹むかと思われるような残酷な」(49) 肉体的訓練に引き続いて、「自分が誰であるかも忘れてしまうような心の内奥」(49) へと向かう精神的な鍛錬にも耐えるのである。

その後、Aesop と Mother Sioux が怪我をしてしまい、その世話等で空を飛ぶ訓練は中止されていたが、ある朝起きてみると、Yehudi の姿が見えないことに気付き、Walt は自分たちが見捨てられたと思い、絶望感に駆られる。やがて彼は無の境地に至り、せいぜい床から数インチ程度のものであったが最初の浮遊を経験する。

Presently I grew still, almost tranquil, and bit by bit a sense of calm spread through me, radiating out among my muscles and oozing toward the tips of my fingers and toes. There were no more thoughts in my head, no more feelings in my heart. I was weightless inside my own body, floating on a placid wave of nothingness, utterly detached and indifferent to the world around me. And that's when I did it for the first time – without warning, without the least notion that it was about to happen. Very slowly, I felt my body rise off the floor. The movement was so natural, so exquisite in its gentleness, it wasn't until I opened my eyes that I understood my limbs were touching only air. (58)

その浮遊は、頭に思いは全く無く、心に感情も無く体重も全て無いという、ただ無の穏やかな波の上に浮かび、自分を取り巻く世界から離脱し無関心となった状態から成し遂げられている。しかし浮遊の成功でさぞ狂喜したかと思えばさにあらず、「今しがた成し遂げたことに対して、何の思いも抱かないまま、石が地の底に落ちて行くように、夢も無い深い眠りに落ちていく」(58-9) のであり、目覚めてからも、"Rather than fill me with ecstasy or gladness, this breakthrough overpowered me with dread. I didn't know myself anymore. I was inhabited by something that wasn't me, and that thing was so terrible, so alien in its

newness, I couldn't bring myself to talk about it." (59) とあるように、喜びではなく、むしろ恐怖心や絶望感に捕われているのである。

以上のように、空中浮遊の成功は絶望の結果として訪れる忘我の無の境地と密接に関わっているとさえいえる。そして、この境地に至る為には、師である Yehudi に対する絶対的信頼と服従が不可欠であったが、特にこの作品では、その要素に聖書的意味合いが強いように思われる。

b. 浮遊の条件としての聖書の絶対的信頼と服従

アケダー（イサク縛り）

既に浮遊のための修行のプロセスの中で、Yehudi に対し、Walt の中にアブラハムに対するイサクのような絶対的信頼と絶対的服従が芽生えたことは述べた。このイサク供儀については、宗教家のみならず哲学者等においても種々の議論がなされてきた。キルケゴールは、『おそれとおののき』の中で、神への真実の信仰を持っている「信仰の騎士」アブラハムについて述べている。アブラハムは神に対して絶対的信頼と服従の念を抱いているからこそ、神から、「あなたの子、あなたの愛するひとり子イサクを連れてモリアの地に行き、わたしが示す山で彼を燔祭としてささげなさい」(Gen.22:2) と言われた時にも、神に対して反論することはおろか、一言も発することなく即刻イサクを連れて旅に出ており、子殺しは罪であるという既成の倫理原則を無視して神の召命に従うことができたのである。一方、息子のイサクのほうも、自分を焼くためのものとは知らぬまま燔祭の薪を背負わされ、神に示された山を上っていく途中、ただ一度アブラハムに対して、「火と薪はありますが、燔祭の小羊はどこにありますか」と父に訊ねるものの「子よ、神みずから燔祭の小羊を備えてくださるであろう」(Gen.22:7) という父の答えに、それ以上の追求をやめている。いよいよクライマックスが訪れ、「彼らが神の示された場所に來たとき、アブラハムはそこに祭壇を築き、たきぎを並べ、その子イサクを縛って祭壇のたきぎの上に載せた」(Gen.22:9) 時も、アブラハムのためらいやイサクが抵抗したとは一切書かれていない。これらのことからアブラハムが神に対して抱いていたのと同様の信頼をイサクは父であるアブラハムに対して抱き、父に絶対服従していたといえよう。

Walt も「父」である Yehudi に対して、それがたとえ自分が燔祭としてささげられることになる神に示された山であったとしても、「来いと言われれば、その方向へ足を向けて、何処であろうと彼の行く所へついて行く」(39) 覚悟ができており、Yehudi の過酷な修行の命令に対しても、"I followed his commands with blind obedience, never bothering to question what his purpose might have been. He told me to jump and jump. He told me to stop breathing, and I stopped breathing." (42) とあるように、盲従の姿勢を示しているのである。以上のような、神や他者に対する絶対的信頼と服従もまた、自己を放棄し無我の境地へと至らせる大きな要因となっているのである。

水上のイエス

この小説は、"I was twelve years old the first time I walked on water."という書き出しで始まる。これはリンドバーグが飛行機で空を飛んだのとはほぼ同時期の1927年5月に Walt が初めて水上を歩けたときの記述であり、"I was walking on water with the same skill as Jesus himself." (86) という言葉からもわかるように、彼が自分の偉業をリンドバーグを上回るものと考えたことは無論のこと、イエスの奇跡に擬えていることがわかる。

空中浮遊の訓練を始めるに際して、Yehudi は、". . . you're not a bird-you're a man. In order to lift you off the ground, we have to crack the heaven in two. We have to turn the whole bloody universe inside out." (38) と述べており、鳥でもないのに重力に逆らって空を飛ぶことは、世界の創造主である神への挑戦に他ならないことを示唆している。⁸

実際に Walt が15センチ位浮遊できるようになると、Yehudi は、"Not like a bird, my little man. Like a god. You'd be the wonder of wonders, Walt, the holy of holies." (70) と述べて、鳥ではなく神のごとく飛び、神の如く聖なるものと崇められるようになるのだと言っている。このように Yehudi の求めている浮遊が、鳥になることではなく、神になることだとわかる。

Walt が言及した水上のイエスについて、聖書の中に出てくる場面は以下の通りである。

Between three and six in the morning he came to them, walking over the lake. When the disciples saw him walking on the lake they were so shaken that they cried out in terror: 'It is a ghost!' But at once he spoke to them: 'Take heart! It is I; do not be afraid.'

Peter called to him: 'Lord, if it is you, tell me to come to you over the water.' 'Come', said Jesus. Peter stepped down from the boat, and walked over the water towards Jesus. But when he saw the strength of the gale he was seized with fear; and beginning to sink, he cried, 'Save me, Lord.' Jesus at once reached out and caught hold of him, and said, 'Why did you hesitate? How little faith you have!' They then climbed into the boat; and the wind dropped. And the men in the boat fell at his feet, exclaiming,

'Truly you are the Son of God.' Mat.14: 25-33

イエスが水の上を歩いてやってくるのを見た使徒たちは、ただ恐れ戦いている。イエスに、「しっかりするのだ、わたしである。怖れることはない」と言われ、やっとペテロが、「わたしに命じて、水の上を渡ってみもとに行かせてください」と言って船から降り、水の上を歩き始めるのだが、風の強さに恐れをなし溺れそうになる。イエスは、ペテロを助けながら、「信仰

の薄い者よ、なぜ疑ったのか」と弟子を叱っている。このことから水上を浮遊するためには、たとえ不可能だと思われることすら一切疑わないだけの深い信仰や、師に対する絶対的信頼が求められていることがわかるだろう。ペテロの場合には欠けていたが、Walt の場合、師である Yehudi に対する絶対的信頼と服従があったために、鳥のごとく飛び神のごとく人々から賞賛される存在になりえたと言えよう。

以上、Mr. Vertigo に見られる様々な浮き沈みについて、主人公 Walt を中心に考察してきた。Walt は浮き沈みの激しい時代に生れ、浮遊にちなんだ場所で生まれ育ち、浮遊と関わりの深い名前を持つというように、非常に浮遊と密接な関わりを持つという背景が与えられている。彼の人生そのものも浮き沈みに富むものになるが、そのみならず他の主要登場人物の人生までも同様に浮き沈みの激しいものとして描かれており、この作品は文字通り様々な浮き沈みに頭がくらくらし目が回る (vertigo) ものとなっている。

種々の浮き沈みの中でも、唯一抽象概念ではなく物理的飛翔であった "Walt the Wonder Boy" としての飛翔を考えてみると、その飛翔を可能にしたのは、様々な浮遊にとって恵まれた背景ではなく、自己の存在すら放棄せざるを得ないような深い絶望と、自分の全てを師に委ねるといふ師に対する絶対的な信頼と服従の念であった。完全なる自己放棄がなされ存在がゼロ以下になった時、浮遊すること可能になるのである。キルケゴールにとって、絶望とは死に至る病であった。だが、この作品では、絶望は確かに沈みきった深き淵ではあるが、そこから浮遊が開始されるという希望の始点でもある。逆というならば、この作品の中で浮き沈みが際限なく繰り返されていることからわかるように、この浮遊は、浮遊の果てには深き淵への転落が待ち受けているという言う結末が予め織り込まれた上での上昇であると言えよう。浮遊と転落、絶望と希望が表裏一体となって輪廻のように果てしなく繰り返されるのが、Paul Auster の描く Mr. Vertigo の世界なのである。

注

- 1 この作品の時代的背景については、拙著「時代と人生を映す鏡としての Mr. Vertigo」(『富山大学人文学部紀要』第40号、2004年、197-210.の中で既に述べたので、詳細は省略させていただく。
- 2 リンドバーグの飛行を資金面で援助したのは、セントスイスの若手実業家であった。
- 3 Yehudi は Walt に向かって、"You've gone as far as I did when I was your age, and beyond this point we're entering new territory, continents no one has ever seen before. I can help you with advice and instruction, I can steer you when you've gone off track, but all the essential things you'll have to discover for yourself."(69)と語り、Walt がパイオニアであり、発見者になることを示唆している。
- 4 Walt は一応、WASP ではあるが、差別の対象となりうる貧乏白人 (Poor White) であると考えられ

る。

- 5 社会的にみても株式市場の大暴落と飛び降り自殺する人々という下降のイメージが支配的であり、このニュースのため、Walt の入院についての記事は、すぐに新聞の第一面から追いやられることになる。
- 6 Yehudi は、この問題に遭遇した浮遊芸人が歴史上他に二人いて、ルイ14世時代のフランス人は、去勢する事で、64歳まで芸を続けられたが、19世紀初頭のチェコ人の場合は、去勢しても何の効果も無く、2ヵ月後に、カレル橋から投身自殺したと語っている。このケースでも、浮遊と失墜というこの作品のテーマが反映されているといえよう。
- 7 Dizzy Dean は、実在の名投手であり、事実がある程度小説の中に反映されている。
- 8 浮遊について考察するために聖書の中で、飛ぶものについて調べてみると、鳥類（鳩、鷺、鳥）と神あるいは神的な物（主、天使、セラピム）と抽象的なもの（富、栄光、呪い）の三つに分類できそうである。fly あるいは flying をキーワードとしてコンコーダンスで調べた結果は以下の通りである。
- 分類1 鳥 Gen.1:20（鳥は地の上、天のおおぞらを飛べ）
 Re.19:17（中空をとんでいる全ての鳥にむかって）
 Re.4:7（とぶわし）
 Ps.55:6（どうか鳩のように翼をもちたいものだ。）
- 分類2 神的なもの
 2Sa22:11（彼=主はケルブに乗って飛び、風の翼に乗ってあらわれた）
 1Sa:6:2 セラピム
 Da9:21（ガブリエルは、すみやかに飛んできて）
- 分類3 抽象概念
 Pr.55:6（富はたちまち自ら翼を生じて、鷺のように天に飛び去る）
 Ho.9:11（エフライムの栄光は、鳥のように飛び去る）
 Pr.26:2（のろいがすすめやつばめのように飛び回る）
 Zec.5:1（飛んでいる巻物=のろいの言葉）

Works Cited

- Auster, Paul. *Mr Vertigo* London: Faber and Faber, 1994.
- . *Leviathan* New York: Penguin Books, 1992.
- . *The Art of Hunger* New York: Penguin Books, 1997.
- Barone, Dennis. *Beyond the Red Notebook: Essay on Paul Auster* Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1995.
- The New English Bible* Oxford University Press, 1970.
- Springer, Carsten *A Paul Auster Sourcebook* Frankfurt am Main: Peter Lang, 2001.
- Strong, James. *Strong's Exhaustive Concordance* Michigan: Gurdian Press, 1976.
- アリエティ・シルヴァーノ 森泉弘次訳『アブラハムと現代精神』教文館 1988.
- 秋元孝文 「重力の孤児」 『アメリカ文学研究』第36号 1999.
- 林敏彦 『大恐慌のアメリカ』岩波新書 1988.
- 松尾式之 『アメリカン ヒーロー』講談社 1993.
- メアリ・バス・ノートン他 本田創造監訳 『アメリカの歴史4——アメリカ社会と第一次世界大戦』三省堂 1996.
- 『聖書』 日本聖書協会